KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

ホ2
5593
1

ホ2
5593
1
ホ2
369
二 歌
冊 墨 三
號 函

詞(コトバ)はやちまた序

歌(ウタ)よみふみうく人(ヒト)をいかもはかりあらじ

いかゝ〳〵まねびかゝ侍ぶらむとはず。ずいもんから

詞(コトバ)の道(ミチ)りぞわきしるべき。そはいかゝ〳〵おち書(フミ)

やうもはた。文(フミ)よやまし歌(ウタ)のふかし。ふうきんをこゝろや

ふかうむとは。てふをはのこゝろぐ〳〵辞(コトバ)の

はをまきそど。そはた代のおりひざ角の詠む

ごろうるはま。姿やびうるこゝ海を。ふゝこゝ海
やうふあらば（こゝでこそ。えあるやじ分し寄
ちまこ。うし詞（コトバ）の學（マナ）びふてハ。いとゆる五十連（イツツニ）の
こゝの海てぬきふよりて。正し考ふなき所こそ。
そもゝ洲五十連（コノイツラ）の音（コエ）とりよれこ。人（ヒト）の口（クチ）より
いづる音（コエ）ハ。うまこゝをはこゝて海てハ海て
おもゝ。よこゝはよこゝまゝ。ゆき所こゝ

[illegible]

ゝ海ひてこゝしあ紙で。辞（コトバ）ハこゝ。ゝ中（チバ）ふ
うよはせ。系（ヨロヅ）か始（ウツロ）こゝて。考（こゝ詞もの）。
一（ヒトツ）ハ。てよまこゝ海ゝ海まく。あやゝこゝし
くぬこゝる。ぬ所こゝハ。てこゝふ意ハ。ハ
ゝこゝの（ゝ海づひの中ごよりをは。辞（コトバ）の
のびこゝ。ゝ辞（コトバ）ふ。こゝまこゝ。自（コナタ）他（ナテタ）のいひこゝ海
など。皆こゝ。経（メテ）縫（ヌキ）ハこゝ。ふ引ようせて。

わきまへ（弁）どころ。いかゝとする言（コト）ゝ
はぶき紙。はゝるまき 俚言（サトビコトハ）ゝはまで。
京ばこゝもみぶしまぶしまぶしまぶしなくなむ
はゝとけゝ。はしで洲八巻（コノヤチマキ）ふとまき（ゝゝ）ゝ紙
はゝ法華の四段（ヨキタ）ふわゝゝ。一段（ヒトキタ）ふまぶゝ。中ゝ二（フタ）
段（キタ）ゝもゝ二段（フタキタ）ゝどゝゝて。四種（ヨクサ）ふとうしゝゝ。
もはゝ洲段（ニノキタグ）ゝふゝて。考（ゝゝ）ゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝて。かゝてゝゝゝ假字（カナ）づゝひの書（フミ）。てふ
を改の書（フミ）ゝゝ。はゝまゝ皆考（はゝはゝして。
今はおゝゝゝゝゝゝを。洲（コノ）
ゝ伝（コトバ）ふゝはゝゝまゝゝゝゝふ。いまゝ世（ヨ）ふ
ゝげゝゝ人（ヒト）もなゝ。ゝて（はゝゝゝる書（フミ）ゝ
ゝぶゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ
いまゝ本居大人（モトヲリノウシ）と鈴屋大人（スゞノヤノウシ）の真子（ミナコ）。
ゝゝゝ。春庭君（ハルニハノキミ）。ゝゝゝふ

考（フタマキ）て。こゝろ之巻ふるむ何らはし
を給ひ。そ。こゝ。ぞ。此（コノコトバ）。玄（ゲン）の玄（ゲン）のこと
やうなるさぐ。わきお（あどけ）ぶ（ぶ）。いみき
ふる（書ブミ）かハ何らける。かくいふ。文化之年
五月十三日。尾張植（ヲハリノウエ）松（マツノ）有（アリノブ）信。

詞八衢上

本居春庭著

詞のたゞしきをいのたゞしきもしらでいたづらに
なるもあれどてをもとゝかくそのをしへをまか
ハりはをしへをまもるがこゝろをこゝろえながして
ちゞれこゝろをといひわちよろづのはをまかゝわ
まぎらはしをもゝ文えるものをキ人の心をおしへあるを
このことゞまをて世中をあゝとしなるをいくゝ
をとをもいひをしまわびやうをたゝをぬをもをゝ
かゝ所きをゝん法（ビンキ）をゝをゝをゝをゝ神代ゝ

おの語からさまざまのなりありて今の世よりいにしへまでかはる語ありける
こはかはりなくいまもかはらずひとつやうにはたらきてかはりゆくもあれど
そのうち語きるゝが語のはしにあれば一文字(ヒトモジ)といへども
ことばのはたらきをみだりにすべきものならねばいにしへのさまもしるべく
なりぬべきをこゝろえずしてみだりになんかきて古への人のおのづからに
きこえて用ひたるふることをもしらず語るをも後の世となりて
きゝしらぬ人のみだりにさかしらなるこゝろもておのがまゝになしてかたるをも
世の人をまどはしむる人もなくとかくあやまりしる書(フミ)もなく
またいにしへのみだりなるをもしらずなほさるものとなりゆきて
なるかなしさよそれを見ればよき人も古へのさまをしらずなりにし

さていかにもかく明らかにものしてくはしくしるしおくべきことなりと
いかにもおもひはかりてなまじひにかくものしてこゝろをもちひて
猶あやまりてあるをもおもひはかりていにしへよりよきよみ文章(フミ)
よく語られる人は己よく心得(ウ)たるなれどもおのがのみ
ものにしあれどもおのれの語の趣をたどりてたがふることもありぬべく
みだりなることはおぼえてもかくいひなしてよく聞えぬこと
まことにあやまれるをいふにもあらねば今の人はこれをしるし
えあむとていふ人のそのはしをまなぶこともかれあげてこれ
くはしくわかちしるしつゝこれを詞八衢となしてもはらよるべきよしをおもひ
そのことはそれ法をよくわきてうたがひなくさとるべくなむ

かくあれど道になぞらへてかくいふのみ也然るにちまたにまよふ
人よくたどりてゆくてをまがふことなかれ
○活きはたらく詞はいとおほかれどすべて四種の活（此事下にいふべし）
をはなれずその中にひとつ行にわたるはいとおほくしてそれになぞらふ
はつる紀他（ホカ）りのそなし次にあげたる 志｜志き｜志く｜又志｜き｜く
とあるごとく詞のごとなかるその餘の活きそれぞれにたがふれどいとせ
ばく詞も其ごとく用ゐし此で 志｜志き｜志く｜志き｜く｜とえ
らくこそ詞といとおほかれどもすべて 加 行の此活にて余
の行はかくはたらくことなるるびの詞なくれで利せべきものと四種の活
たらくきは あ 加 さ た な は ま や ら 王 の行にわたしわかちぬ

ことなる其の活あるは文行毎に文四種三種あるもありて二種
なるもあり此活もまた二つのきまりいでもひで此詞は
いとおほしかれば先その四種のまがふことなきやうにとむねへて
ことさらに図をなをはじめ次々にそのよしをしるし書（カキ）たる
しかしてその餘此種くの此活を別にあげたるべし
○四種の活といふは四段の活一段の活中二段の活下二段の活此四つ
別の活のさまにて次よりも詳しく此にてそれぞれ此名をよめり
○ことあらざれどもよき名をかかりいかにせん文字同なくてはたがふあし
此れまで今かりに打當ることなるは下にすべて此名をもていへり
○四段の活とはかきくけ き志さ せとゆるしに第一の音より四の音

まで次く四段よあがんあきあく あげおさんおじあげあせ
などもみくるもいみく此法行かぎりなくいとあかし
○一段の活とは いるいまききるきれなど第二の音一段のうに
射 著
てはみくるまいふるいれきるきれのるまハさるくて活を
なるとふりて某行の音ハかるるとはて此活をぐて一音ハ
ていきといかう外なのれぞ活用いとまくなし
○中二段の活とは きくるるれちつるつれと第二乃
音三の音二段りてあきおくおるおれそちとぐとぐる
とぐれなとはみくるもいふ所ハるるれつるつれのるれハ
一段の活の形よいくるがかし此活用もあれうば

○下二段の活とは くるるれけまるまれせと第三
の音と仁の音との二段りてうくうるれうけ
えるるえるまえなるるるるるるいくあるるれまる
きれのるまハるれを上よいくるるあるじ此活の用ハいとあかし
○又此四種の活の用ハたぐひりていまくら活ざるの外異なるあり
そるるかりて変格とるばるるてる用ある行の圖りあぐうそのう
よしまるるくにいかばいかし

一段の活き詞は一言なれども轉り活くけそ便宜從ひて四あるいも下二あるいもなれども活きなり見る增減る增減る四試みる試む上二

○四種の活の圖 并受るてにをは

四段の活	一段の活	中二段
飽押打逢住釣	射著似干見居	起落戀試
らまはたさか	いきかひちみ	みひちき
まんぬじでぞ	まんぬじでぞ	ぬじでぞ
りみひちゑき		
しるけうて	しるけうて	けうて
きゑぬるきて	きゑぬるきて	きて
るむふつもく	かるみるひるゐるいる	むふつく
ともらしごきんめ	ともらしごきんめ	らきんめ
むるまるるる		むるまるるる
ようをふまでかな	ようをふまでかな	ふまでかな
まめへてせけ	ゑれゑれゑれゑれ	ゑれゑれ
どもぐぐぐぐ	どもぐぐぐぐ	ぐぐ

此處四段の活と一段の活とハ切るゝ續くとを兼て一つなるを中二段の活下二段の活とハ二つに分れたり

活の率	下二段の活	
老舊	得受痩捨兼辨誉消枯飢	
いりかえけてへめえもゑ		受るてにをは
まんぬじでぞ		
しるけうて		
きゑぬるきて		
くもつふむるう		此處一段の活中二段の活下二段の活ハ一つなるを四段の活とそハ二つまわれり
ともらしごきんめ		
ゆるるるゆ		
ようをふまでかな		
ゑれゑれゑれゑれ		
どもぐぐぐぐ		

○れてたの活用（ダラキコトバ）より受るてるもとは狂いとおかれどこもごとく八
いぎきぎその大低をあげてるなり又やたのみ助のこゝろく
ゆふさやゝくゆくやゝくなどきよあもくゝうそうあまてく
きくこゝなりきくあるなりうめどゆゆるよあもうくるこにもそん
ちぎそまよぎらもしばきばこれものせざ活用う
○四段の活そ あ な や ヒ の四行りたなし第一の言かさたはまらハ
そのまゝにて八未ダ活をなきそくぞあんあらだあらじかさん
かきだかきじゝんゝだゝじなどそあゝかきゝうもの
みりて八活をなきぞ活ちうを下ヨ受るてにもものんぞし
りて語を助そなりこれそ四段の活かかれる事りて一段の活中

二段の活下二段の活りてこの活をなきぞ活をしはて此第
一の言よりゝこにてふをはハそでじぬんましなど助う外
二の音きそちひみヒハ用言へ続ぐゝ初なりうこにてにもはハ
ててりうきりんなびぬるつるしそのちどな乗外三のまるく
そつふむるハ切るゝ初と躰言へ続く初ともかきくあ受るてふ
もはもニッをもちひて切るかこうう受るてにもそハあめらん
べきらし必ず必も続く初よりうこるてふをはハかなまでく
かをようなど助り外四のまるけせてへめまハここの活初あう
受るてにもそハむ必ずとるもなどあり
○一段の活ハ さ た や ら の四行りたそなし此活ハくあぐ外二のまる

いきおひみねれ言れうの法りて四段の法の第一の音と二の言と
の二の法とかねて用言へ法ゝく詞ありゝゝ法てふもとはもこの
二ッもとりも用ゐるうゝく図のごゝゝし又此言ふるもゝきこゝろへこゝる八
四段の法れ第三の言と同じゝく切るゝ詞と終言へ法ゝくゝゝ
かねて受るてふもとはと二つも用ゐるも四段の法りゐなじ又ま
もゝもそへゝるて四段の法れ第四の言と同じゝくこゝろの法ひ
うゝりうゝ法てふもとも同じ仮しるゝもゝもそ第て切るゝ詞と
法ゝゝく詞もとりねゝる八法後の室まりゝ法てふとゝくそ万系系十ふ
真聖のうもゝぶ法ゝて賛良思文 友今系り花ゝゝもゝる六性六
又拾ゑのもゝはと似べき法後撰集り出てるべき人もゝらしもも

ち俗日記と似法きなと第二の言いきりよひみねよりり切るゝ詞もゝ
うふてふもとはもゝ用ひうゝ代外行ゐ系ゝ

○中二段の法も あ さ な の三行うゝなし第二の言きちひみ巳ね
ゝゝれも四段の法の第一の言と二の言とゝ法とかねて用言へ続
ゝく詞ありゝ受るてふもとはもこゝを用ひゝると一段の法の同じ
第二の言くつふむゆるうゝ八四段の法の第三の言れ切るゝ詞のかゝ
にてゝゝるてふもとはもそのかるゝかゝれゝりうんへきらしゝ
ともなゝゝも用ゐる風うゝ又此言にるもじもゝゝくゝる八四段の法の第
三の言れ終言へ法ゝくゝ詞のかゝゝるてゝゝるてふもとはもそのかゝ
を用ひゝくかなまでふもとうなゝゝも又まもじもゝゝくゝる八四

段の活用第三の音の活用とおなじくこゝの法びとうてうこゝてはと
もゝもそれなりこゝなるゝとなりし

○下二段の活用を十切こゝとくとあり第三の音うゝまつぬふむ
ゆるう八四段の活用第三の音はきる行の活のかゝたくうゝ歟
てふのそもそのゝもそのゝもそもふるなめ又はきるゝもしゝとうまて
いまるゝて四段活の第三の音はれ歟言へはゞゝ行のかゝうて受るて
みゝをはゝもそのかゝのてにをハゝ用ゐるなめ又まゝもゝとうく

○第四段の活の第四の音と同じくこゝのむまびことばうて受
活てふもとはもゝれのれなし第四の音えけせてねへえれ
ゝ八四段の活の第一の音と第二の音とをかゝて用言へ続く行そ

受るてにをもゝもゝもゝもゝその二ゝもゝうまこ用ゐゝもゝ二段の活のいきふひ
みゝ中二段の活のきちひみいゝ

○はてかゝく受るてふもゝ八ゝ四なゝゝにもおしてわゝゝ八しきゝ
までいくるゝを無益のこゝゝ四中へもゝる活八れゝて受るてに
もゝは八図のゝく横ゝ通ゝて此しゝもたかゝゝを外くいゝ四しく
又四猫の活用をゝもゝもゝうんゝこの受るてふもゝはゝもゝてはゝむ
活の肝要なれゝそよく弁へきえんゝうあなゝかそ八ゝでゝじ
ぬんまゝしのてにをはゝを第一の音かさたなまらようゝるハ
四段の活用ゝもゝる活ゝく第二の音いきちふひみゝねよう受る
ゝ一段の活用中二段の活用ゝもゝるゝく第四の音えけせてねへ

めえまき恵よりゑる八下二段の活用ともるべきなり此外ともぐ
てたのめく受るてふもとはるるようゆてふはやてきばよのもふるる
なりてハ受るてふもとものをいくるふく又図をとゝるるてさるべし

○続く詞そのやゝ何の活びよりてこれ〳〵の辞（テニヲハ）止りあるとき是を
切て下へ活ぐらるるなり四段の活の井三の著くまつふむるを
きるゝ用と終ぐく用ともかねてゆくおもふわるゝなどいひ
てきまつもしゆく舟おもふ人日るる川なぐいひて活ぐきるを
まふなり一段の活を井二の著いきにひみかるるもまつて更て
うゆをもるく用と終ぐく用ともるてきるみるなどいひてき
ふゝ用ともしゆきる衣ゝる花などいひて活ぐゝ用ともるを

中二段の活と下二段の活八四段の活の同し筭三の著うくまつぬ
ふむゆるうゝあぐ〳〵（過）ちぐ〳〵（戀）ふ（明）ゆく（流）なぐるとのいひてハ切る
用ともて終ぐ〳〵ふる頃あるる歌なぐるく水なぐ
るもぐ〳〵ちぐ〳〵いちぐれぐ活ぐゝ用ぐる船うまぐて続く用と
りゆハ弁言へ活ぐゝちふたぐし用言く終ぐ〳〵ハ活も別な
てそ〳〵ちゆの〳〵せて八終ぐく用ともいとぐるなゆ用言へ活ぐく
用ともゆ四段の活一段の活井二段の活まて八井二の著いきちちゆひ
みいゆおよゆゆきかゝよおもひあるゆきなの〳〵ゆたぐ
おきゝのゝきうゝみゆぐるなぐいひ下二段の活まて八井四の著えけ
せて終へ兄元まき恵よりゆうけとうきぜ奉るなぐゆやるなどいふハ

異なる用言へつゞける例

○右にいへる如く知の詞を四段の活にて八第四の音けせてへめを
そのほかのたとへは咲らくも渡おもへなどいひて即下知の詞となる
を一段の活のうち八第二の音いきちひみ思ねにようつしてそへて拾遺
集にやへさく藤の衣きをよ又古今集に山のさくらを見あかねん
又に蜻蛉日記にはちりはつる花ねよとてうすきそひしゅなどいひ中
二段の活も第二の音きちひみいえねにうつしてとりて古今集
にこれ一をまじへよろとくへきまし又は風雲のかよひち吹とぢよ
吹風をなきてうらみよう鶯は物語藏開にまあとねむとおいよ
杉もの松拾遺集にひとめの八るもしるもの心よりやなどいひ下

二段の活を第四の音えけせて經へめえまを意によりもじをそへて
古今集に人の心は法よりありのつかぬ舟拾遺集にうつろふ梅のぞくりぬるかな
おもひよきく又新古今かさねよみ代のなさけ古今集にみれよ
おしつよめきてうらみむ万葉集にききなりたよめ余古今集に
はひまつ八あれよ拾遺集をも風とあかて此三種の活は八かくよろじ
をそゆへからず下知の詞と八なしゆずる例しふるく八下二段の
活詞りおほもじをそへて又古事記下巻其に加理許母能美陀
禮婆美陀禮續紀宣命にかくなりてはつる言止等のめたまふ
万葉集二にまつらうるるハ國手治跡同五によろずに幸ゆきまく河をおぞ
思良之米同十七に阿比見之米等曾同十八にかくおくうせそらん

之米多底人の志る所く四十九り馬志まし停息佛豆石河り
都止米毛呂毛呂に〳〵そもろ〳〵大神宮儀式帳に國幣罪えく把遇ル
人尓云し秡清止定給支東遊風俗秀古本に与世波与勢与曽不流
比止能尓久可良難久尓なむ〳〵ものいふ今の世りそ〳〵ぬ〳〵
ちるこゝろ古への一格と古ゞ集のこゝろよりこれを此例ともく
見あ〳〵ぶ〳〵順集ふ志こゝひまそる志ばしこゝの志〳〵がきみ
聖ふかなそ志ちそはやく志あり波志と為るけこゝなり一段の活詞中
二段の活こゝばりの八此例古へりこゝなし
○活詞を辨言りいまるこゝあり〳〵そこ四段の活一段の活中二段の
活きいづれも才二の言いき志ちふひみいぬるて四段の活八才三

○活詞を辨言りいまるこゝあり〳〵そこ四段の活一段の活中二段の
活きいづれも才二の言いき志ちふひみいぬるて四段の活八才三
段の活中二段の活の才二の言志十二段の活の才四の言とはゞ〳〵き四
段活詞の才三の言いき志ちふひみいぬるて四段の活八才三
段の活中二段の活の才二の言志十二段の活の才四の言とはゞ〳〵き四
段活詞の才三の言いき志ちふひみいぬるて四段の活八才三

○活詞を辨言りいまるこゝあり〳〵そこ四段の活一段の活中二段の
活きいづれも才二の言いき志ちふひみいぬるて四段の活八才三
段の活中二段の活の才二の言志十二段の活の才四の言とはゞ〳〵き四
段活詞の才三の言いき志ちふひみいぬるて四段の活八才三

ゝきこと受るてにをはなど図をうんてよをるべし

○四段の法の才一の音かさたまらようゆらなのん　ゆうねゆくらねなゆくうくるゆるゆ第二の音きちひふへとよめ

ゆきなんとめなんゆきねとめねなゆく受てるとなんねハ同じ

くるなまでくもその受るところ代るりよめてそかそるなめ一段

の法と中二段の法を才二の言いきちひふへいねようきなん著

みなんきねえねといひてたゝ三をかゝ下二段の法を才四の言え

現

けせてねへめえまをよめうゆなんようけなんようけねようせねなど寄受

いひくおゆでくこをかねゆうこを前後の行ってたのおうう

ゝ代ってるうるるを代るとなめけふう

おのゝ今くして他のまゝハ混ぎるうゆなきくし

○中二段の法の第三の言りよるゆじをそくてるるこる代るふるもるる

ゆるるるくうるるを俗言りハ才二のまるふうゆしてきるちるひるみる

いるるかるるなるといるゆおるるを起ゆるるをあきるゆゆるるをとぶるるゝもる

ゝをくゝみるなどいくるるゆるるゝ又下二段の法の才三の言りみるもじを

そくていかるるるるるるるゆるるゆるるゆるるゆるるゆるるゆるるゆるるを俗言

みそ才四の巻かう部しそえるはげるせるてるねるへるめるえるれる
ゑるもいめげ宣まうゆてうそる　度
をまそてるもいゆの屮し於下よゑせる図の巻くかゝゝゝん片假字（カタカナ）
字部ゆまてはもゝもゝえて新べし四段の活一段の活りへかく俗言り
らゝる活ゆなし但し四段の活知の才一の巻かさたゆまらようんの
てにもゝはを受るよ俗そふいゝるもあうそ考そ才一のまるとんのて
るもゝをなるゝせて才ゑのまるこそとかもゝといくうゆゝんをゆこ
かぎゝゝんをかぎゝをまゝゝんをまをいゝをんをいぎなどいゆし
○四段の活の第四の巻はけせてへめをようらゝるれゆく活くあうえハ
はまゝゝんさゝゝうさはるはゝれおもくんおゝくめたもくるおゝれ

かまゝあゝんかまゝえゝうかはゝあるかはゝぎえれなどいへることれゝうはて
このさはるおもくるかゝゝある別どゝゆゆゝて羅行のはゝ
段の活よ入べきはゝなれど受るてゝもゝはるをようゝゝゝゝて四段
の活よ全くおゝおゝしれどもゝらゝはよいゝくゝゝを
にして四段の活の初ともゝがゝゝてハさゝゝんゝゝゝゝばなどハゝく
まどさゝゝらゝどさはゝうましなどハくくまゝゝくはゝゝゝばさえゝうしゝ
などくいゆゝゝれどはまめてさえめゝめゝるゝゝどハいゝはゝゝくゝゝされゝゝゝさし活もれ
よかゝゝくくてゝゝるゝゝ一段の活中二段の活下二段の活よ入此活あし

阿行之圖　并受るてにをはの図

一段の活

下二段活

射イル 鑄イル	得ル
い	え
きんぬじでぎ	まんぬじでぎ
てうきて げんぬぎ つるぬぐ	てうつて げんぬぎ つるぬぐ
いる	う
めうんべきらしりとも	めうんべきらしりとも
かまをよう	かまをよう
いれ	う
でぎぐども	でぎぐども

○此行ゐを四段の活中二段の活なり

○図の上ゐ射。鑄。得。などの字をもるしたるハもと活用の文字も

こゝを図をもるしてその活ざまをはやくもるばきたるなり

その活用を次ゐ如ぎめ下の図のごとくもるこゝろのまう

○此一段の活ハ此行のいゐ也行のいゐ定名がこれ必くせんもバ

らくこゝにおしわたるとゐ何まのこゝろをたしゐ定

もべきよめゞこゝろなりよく考べし

一段の活詞

いる射　いる鑄

○此活用まべて一音のみまれバいとしくるゐなしいづれの行もはゐ

下二段の活詞

此うるを俗言ゐへうるといゐ例れめ

うる得

こゝろこゝろ

○こゝろ心をうるといゐ意ゐなどれの類の〻この用のごとくゐ

なめゝめれざこゝに出べし此類ひ行ゐもし

加行之圖 并受るてにをはの図

	四段の活	一段の活	中二段活	變格の活
	飽(アク) 吹(フク)	著(キル)	起(オクル) 過(スグル)	來(クル)
	か	き	き	こ
	まんぬしでは	まんぬしでは	まんぬしでは	まんぬしては
	き	き	き	き
	けんうてきて	けんうてきて	けんうてきて	けんうてきて
	しるぬるあびて	しるぬるあびて	しるぬるあびて	しるぬるあびて
	く	きる	く	く
	ぬやらべきらめ	ぬやらべきらめ	ぬやらべきらめ	ぬやらべきらめ
	ふ	ふ	ふ	ふ
	をまでかなよ	をまでかなよ	をまでかなよ	をまでかなよ
	れ	れ	れ	れ
	びぬぐで	びぬぐで	びぬぐで	びぬぐで

来ヲキてくこえきこそうトヤウニ羅行四段ニモ活用スルコトヲ云フハ畢竟辞ノ而部ノ約ノ流ハリタルナリサテ辞ノ時ハ他ノ辞ヲ活語ノ如ク受ルフアメハサレモカリ一ツノ活語トナレ

ルバスベテノ辞ヲ悉ウクルコトノ得ラルルニ妙アリ

受(ウクル) 授(サズクル)

	け
	まんぬし
	しるぬるあびて
	く
	ぬやらべきらめ
	る
	ふをまでかなよ
	れ
	びぬぐで

○変格の活きるとは來の詞のみにて此外なし活きるとは受るてにをはなどの図の如し但し志きるとはまうるるきしきしかなどきよめのみ受る格なるもそれハいと少

まうるこしこしかあどこようらけるきしはてまべてのみ

活くきくこれのみにて外に例なし又下知の詞のきこそれ見いだる例なめ

四段の活詞

○やちやちて上

あく　あく

○あかく　あぐもく

○あさぐも　あさぐ
あわる
○いく
○いそぐ　いぬる
○いなの　いる
○うえる　う
○うたく　うそぶく
○うなぐ　うえる
○おく　おもむく
およぐ　かく
かぐや　かしづく
○かぜく　かぶく
○かひろく　かとく

○きそく　○きそらめく
○くぐ　くぐる
○くもる　くる
○さく　さかる
○さぐめく　さぐる
○さぶく　さめぐ
○さのぐ　さぶく
○そく　そく
○そぐ　そぐ
○そく　そくめく

○そぐろ　○そもぐ
そよのめ　○たく
たくぐ　たなびく
ねく　ねぐ
ねぐぐく　ねもぐ
ねらーく　ぬく
○ぬぐ　○ぬぐ
ぬくめく　○ぬろく
なびく　なぐ
ぬく　ぬぐ

○そもく　そむく
たぐ　たぐろく
たひくぐ　○たもめぐ
ねぐ　○ねく
ねぐぐ　ねもめく
ぬくめぐ　ぬくめく
ぬぐ　○ぬぐろく
なく　なぐ
○なぐぐ　なぐめく
ぬらぐく　ぬぐ

○のく　のそく
そぐ　○そぐく
○そぬく　そぬく
ひく　ひーそく
ひぐく　○ひらく
ひめく　○ひろそく
ふもぐ　ふせぐ
ふぐ　○ふぐく
○ふぐく　ものそく
まぐ　○まろく
みがく　みぐろく
みちぐく　○みぐく
みぐ　むく

曲るまげまぐ
下こめ

もぐ　　まぐ　　やく

やはぐ　　ゆく　　ゆらぐ　　ゆるぐ

よく　　ゐく　　ゐらぐ　　ゐるぐ

ゐなく　　ゐなぐ　　ゑらぐ　　ゑるぐ

こもあく　　ものく　　もぐ　　やく

○右ノ挙ル所の頭ノ字ノ下ニ○の字を付ル時ハ其ノ句の活用の證を下に引るものるしし下みふおれど

○右ノ如しる句の外何ぞくといふる句ハおほかるべし

ゐなの丹活用

○あぐく　新撰字鏡ニ蹠阿加久と云

○あもやぐ　源氏物語寄生ニ　あもやぎて　えくなと　ハあり

○あるく　万葉集三ノ阿倍寺ハ我こぎあるそ　和名抄ニ喘息安倍岐　枕草紙ニ老ぬるものは　たくあへぎ　あめくえくあくさまやこひなどいくつ

○あゆく　拾遺集物名ノ星の　あゆぐとくくる八千載集雜ノ　あゆく　苔衣ノ　あめ

○いく　六帖四ノ　いけるひのえくう　ハ　物語祭使ノ　いくよれ　このめも　拾遺集別ノ　いくくまろ　同恋ノ　いくやと　ハ　後拾遺集恋ノ　いかんとそ　ハ　源氏物語桐壺ノ　いまもの　ハ　命を　ハ　手習巻ノ　いたちたんいくやう　ハ　ある法きと　伊勢集

又系多かくいうもとなるべバ後六々撰又実方朝臣いうそくぶく
おとふれもそうそあれ小侍従集よりいうぞいきこそなるべおくまてじ
史本集又新隆ていく藥とる位よしの浦なとれあり はてけ
河此行の中二段の活りていきいくいくるいくきとめて活く
河とそえくしたかく四段又活ったしるる方えくて中二段又用ひ
しるるそいと稀ちれそかくおろく挙てそよしきそくるる
活をり又右のかく四段りもも中二段りる活きて同じ方の歌
河られかもあり歌そ巡くりよいあべし
○いまくく 古事記中巻りちそるめ 伊須く岐伎とあり此
詞外又えくぶられども比結なる活し

○いそそく 万葉集一又伊蘇波久見れそあり
○いなく 拾遺集又れのきいふけとなる集
○いらく 源氏物語榊姫君りはむ巻にいらきこそるという
○うるそく 祝初又宇須波伎坐せとなり
○うるく 源氏朝顔又御門守さもげふるはそひうるそき
いできなてそくとあるるそ用ひ
○うく 古事記下巻又其猪怒而宇多岐依来日本紀哥
又宇拖枳かくうるそ用ひうく
○うなぐ 万葉十六又みぐ宇奈雅流玉のなる形を日本紀
にうれがぐると延てもいうめ

○うなゐ〳〵　竹取物語にうなゐぐとあり

○かゐ〳〵　万葉十八に可豆良乎　可豆良伎十九に蘰可年又可豆良良久八　山ちゝ日かけ　可豆良家流なゝ〳〵　狂言記

○かひろ〳〵　和名抄に紬加比路久注に舩不安也ゝ〳〵あるを

うゝ氏法華経にかひろぐし

○きゝ〳〵　枕草紙にきゝし　車にもかてとあり

○きらめく　うゐ〳〵物語に後陰にきゝ〳〵えまてといふまり

○くく　古事記上にわがうなのきこゝろ　久岐斯子也　万葉集十七に

ちゝ〳〵ぎ氏ま多知久吉十九に立久久等ちふかたちゝ〳〵

○こゝろ〳〵　源氏みをゐくしふこゝろ　後撰ありけるこゝ

若菜上に冠のゐこゝろ　こゝろ〳〵氏ろぎ氏ゝる　又拾遺集流に

こゝろぎて　狂言記

○こゝ〳〵　住吉物語にうちこゝ　こゝきまに本集にぬかあこゝ

こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ

○けゝや〳〵　源氏松風にけゝやきてまゐりぬとあり

○こゝろ〳〵　和名抄に嘶咽古路々久とあることゝ

○けゝや〳〵　後撰集に人をてさゝやきこゝれをこゝとあり

○けゝ〳〵　万葉集二に言佐数久とあり

○こゝ〳〵　古今集物名に糸宿の花のこゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ

狂言記又冊後守為忠家百そくに仲正をこゝれをもれゐるた

ぶるまでかれてとゝを活つしいくり

○ゝゝ　万葉十九に底きよみ之都久いしまと催馬樂に

江の波（ハヰニシラタヽ）爪尓之良太万之川久也云く古今集に水の面にさゝく

花の散まがへるなとあり

○ゝゝ　こゝ尓あ行あて之に水の実形の葉をまぎて云く

又ふゝをちいゝゝおしつゝみてゆしてまきいれてなどあ

又源氏若紫に法くきものはゝかゝ〻まらせしてゝ詠ふ

金紫集連哥に春の田に水きいれぬ底きおきれるなかの

花なゝちにみゝと入ぞやあゝもいくあ

○ゝゝみゝ〻　新撰字鏡に悚悍惶遽也於地加志古弥須弥也久

又紅花集恋に春やれはゝとゝもなり炭焼をかまくり

○ゝゝ　古事記下巻に言ばもれ曽岐をもゝとあり

○ゝゝゝ　枕草紙に水のあゝゝくめきゝなり

○ゝゝろ〻　丈木集に巻ゝろきあるゝのまく

○ゝ尓ど〻　源氏榊巻にぬまゝくゝゝゝ尓ぶきて竹川

巻にゝゝ尓少きゝとあり

○ゝゝ　万葉二に多氣なれ多香根ハ長き九に加夫多久

までに十に手すゝなくゝ巻しゝゝゝ云くなどあり又十

四にゝゝゝ多具とゝ十九に馬太伎ゆけばとゝるゝ日し河

う別にゝゝも活きハあるしゝゝ

○[illegible] 源氏総角より[illegible]とあり

○[illegible] 万葉十六より石ももて都追伎やぶめとあり

○[illegible] 古事紀上巻より[illegible]ぬ都羅さ玖

○[illegible] 和名抄より止豆木乎之南止里又祝詞より嫁継給豆

○[illegible] 重之集よりそのゑやふせやにとぐくかハ稽もとあり

○[illegible] 日本紀より鳴呼騒動諠言諠譁なども[illegible]あり

○[illegible] 古事紀上巻より[illegible]たゐれ斗呂々岐豆とあり

○なくぐ 古事紀下巻より必自跛也 字鏡より驩足奈戸久馬又

和名抄より蹇訓阿之奈閉此間云那閉久まと蜻蛉日紀三より[illegible]

○[illegible]

○の〳〵 堀川二郎百首より[illegible]

よ[illegible]れ[illegible]文より八[illegible]

○[illegible] 万葉十四より波自伎おきてとあり

○[illegible] 竹取物語より[illegible]

○[illegible] 蜻蛉日紀三より[illegible]の思ひ[illegible]

[illegible]あるのみ[illegible]

[illegible]

活用の例より下二段の活の[illegible]

の例なり[illegible]

○[illegible] 源氏箒木より[illegible]

日記に　あをにひがちに　ちぐらし　ともいふ

○ちぐらぐ　枕草紙に　ひろへきて　とある

○ふぐく　日本紀に　恚恨（フクフク）　哭恚怨（ナキフクフク）　などよめり

○ふぐく　蜻蛉日記五に　雨風いとしくふぐぐとなりまさ

夫木集に　ふぐかれて　ふるもはずかしいろ

○ほぐく　日本紀神代巻に　神祝（カムホナキ）　祝（ホナキ）　とよめり

○まくらく　古事記中巻に　枕其后之御膝（ニノフキテ）　万葉集五に　人

のちぐさ　ぬぐ　摩久良可武（マクラカム）　などあり

○まくらく　字鏡に　瞳　目數動貞　万志呂久（マシロク）　とあり

○みそぶ　万葉三に　潔身而（ミソギテ）　麻之乎　浜松中納言物がたり　寄

ちくらに　ほをみそぐ　神のうきねぞやうくなる　とある

○みぐく　万葉十八に　うちのぐ　美都久（ミツク）　かぞねとなり　又

ぢう　弥豆伎（ミツキ）　ともよめるも同言なるべし

○ゆらぐ　万葉二十に　由良久（ユラク）　玉のをとあり

○ゆるぐ　伯耆物語に　ゆるぐ　ゆるぐ　又枕草紙に　ゆるぐ　ゆるぐ　あ

ひまくゆるるも　うくなるべしいふかり

○よく　後撰集秋に　宿をよろなん　要之集に　よく　そなな

き　秋の夜の月　又よろ　そあくし　夜風集に　秋をよろなん

元真集に　ふの宿の　荻の葉に　とよめ　蜻蛉日記に　ふくし

ぬぎそへよろ　なくに　夜衣三に　よくかろ　ぬ　ぬ　ぬ　又四に

ひさかたのあめ堀川百首に引用せる歌に「かけて」
あるは那波守為忠家百首に仲正ちかけるとあるし
むかしよりかなにはあり」けて此詞は行の中二段にも活き
て意全く同じ八れどかく例を多く引出せるなり
○わらべ　花草紙に「わらべあり」
○あらべ　字鏡に喉出気息心呻吟也恵奈久
○をく　萬葉十七に呼火とし「をくになられぞ」拾遺秋
名よばしあるのもをくるせんとをくなどあり
○ををく　花草紙に「ををけぞとをかめ」
○万葉三に見毛左可受伎濃十四に「波可馬可毛」など

ある八全くこれ活詞のはてなれどかくもて代外に活きてる
例多なく又かく活き詞のさまもこれぞかぞ代
活詞のおくるハ多くさて此詞ハ行下二段の活なれバ凡
。。。
さけぞきこえ　おくるもみめかもとらめぐき例ちり凡てをめ
のてにをはに才一の考よりかうこそ四段の活に才四の考より
受る八下二段の活なる事止りてもいまるらぬし

一段の活詞

きくる
著

中二段

○いくるる

○なぶくる

下二段の活詞

此くるまと俗言ハ計るとの外例なり

あくる　あぐる　○あくくる。
いそくる　うくる　うくぶくる　おもむくる。
かくる　かぐる　○かぶくる　かぶくる。
○かたくる　くぐくる。　はくる　○はぐる
けくぶる　はぐくる　はくみくぐる　ちかくる
○ちくくる　○ちくぶる　○ちくぐる　○ちくくる。
そむくる　ふくる　ふくたくる　ふくたくる
ふくひくぶる　ふくむくる　ぬくる　ぬぐくる。
ぬぐくる　ぬくぐる　なくる　なぐくる

なぐくる　ふぐる　ねくる　ねぐくる
○のくる　○ちぶる　○ちぶくる　○ひくくる
○ひくくる　ひくくる　ひくぐる　ふぐる
○ほくる　○ほくくる　まくる　まぐる
○むくる　○やくる　やくぐる　ゆくる
○ゆくくる　○ゆくくる

○あくくる　古事記中巻又逃散（ニケアクレ）　日本紀神代巻又散去（ノラクヌ）又廿
六又散卒（ナラクヌ）　なぐ（ノ）ぶ（ク）

○いそくる　源氏繪合又いとまくる　はふくるひ　栄花物語かくも
く藤壺又いそげくる　ことくくるなどあり

○うゝぐる 古事記中巻よりおかまきに宇羅宜て又下巻にあり又うゝがしとゆふ河も河

○かじくる 古事記下巻ゆ姿體瘦萎云々 源氏ゆ浅茅屋よかし巻みる云々 堀河次郎百首よゝ〜ゆ〜をおかるひつじのうじゆけ〜云々などよみたり

○かまくる 日本紀皇極巻ゆ感ゆ 別記 続日本紀宣命より感天又万葉十六ゆ後〜ゆ〜うらや牧間毛而をうんなどかみありてかりくるとうたうぐれどもうゝ治ゆ

○はぐる 拾遺神樂哥より さげたきて催馬樂より宮ゆの さぐるゆゆ〜うたうゝなどあり

○ちゝくる 〜ゆ物語國讓の巻ゆかゝ〜ゆのあはく ちゝくるを忠見集ゆひゝぐかうゝゆ〜くるゆでに

○ちゝぐる 〜ゆかゆ吹上の巻上ゆよみちらまてこめ云々 金葉集九ゆよゆぬちゝげ ゆゝくるしとなげあり

○ちぐる 古今集物名ゆ波の跡をそゞて ゆゝぐるをみる六帖五の下ゆちぐまてひゝくらん 拾遺張よゝ ゆゝなどの跡ゆゝぐるを

○ちゝくる 源氏野分ゆちぐまてゝ ゆゝくるちぐ形をうちまぐるらし 散木集ゆ書きもなをしのゝ〜ゆ〜ちゝくるもゝ〜ゆゝにもちゝけざめ八ゆ 冊後寺為忠家百首ゆ ちるちゝくゝゆゝにやゝ深ゆの烟しゆ

○のくる　住吉物語より出くのきてかくまう

○たぐる　万葉集二より引くくるをかめ波氣まさ引くり作留

わけるなどあり

○たるくる　うけ平物語俊蔭下りまきてもばるんとおり

外平源氏ものがたりなどに多し

○引しくる　源氏あぜまの花の絵をひしげてあぶり　狩衣

二りまものを引しけるとあ案

○引やくる　源氏須戸より引やけたらんまことひき又若小采

りあ目めこやけてこのもしきなきさ　栄花物語初花

に内の法使えこやけてまくまくなどあり

○ほくる　源氏朋石よりほくなげられてこくなどれあり

○ほろくる　源氏蛍にそそとかくしもろけてとりあ

○むくる　万葉五よかくをと武氣たろくげりなどれあり

○やくる　万葉一よもそで所焼とよそう

○ゆくくるう物語吹上よたきの布のさくげる

○わくくる　万葉五よ和和氣さぐれるかくよあり

○古事記中巻歌よくもち波氣まくを万葉十四よあをねし

奈久流ものを下りるまかくあくこれくそもかぐなのしもる

の竹ゆくるにて弱れ結引よそ泣しで又まもたるよなるなる

もまかくぜ源氏手習よいまそくえよりしくこくとあ

[illegible]

約するゞやゞく一の活用もなのれるを組のつゞめていとおゝ

かまつゞくこゝろそなくそなくれなくなくまゝ　なるを

まく　まくる　まくれ　いく　いくる　いくれなゞ八活く活く

もあゞもれぞゞもいひてはのくるを　なゝもゝもゝゝゝ

まゝまくることいゝくることゝゝとゝきゝくゝんがくゝいくゝゝ

くゝゝなゝまゝそくれ活用の八挙げるも他行の九此くゝゝ

活まつゝれあゝまゝゝくゝゝにゝゝくし

九行之圖　并受くてたゝまゝの図

四段の活

押サス指	爲スル	合アハスル 瘦ヤスル
さ	せ	せ
まんぬじでぞ	まんぬじでぞ	まんぬじでぞ
ち	ち	ち
しるけんちゞてきつ	しるけんちゞてきつ	しるけんちゞてきつ
ち	ち	ち
まるぬんちゞてきつ	まるぬんちゞてきつ	まるぬんちゞてきつ
ち	ち	ち
ゝゝらべきんめゝ	ゝゝらべきんめゝ	ゝゝらべきんめゝ
ち	ち	ち
ゝゝらべきんめゝ	ゝゝらべきんめゝ	ゝゝらべきんめゝ
ち	ち	ち
よをゝまでかな	よをゝまでかな	よをゝまでかな
ち	ち	ち
よをゝまでかな	よをゝまでかな	よをゝまでかな
ち	ち	ち
どもゝゝくゝた	どもゝゝくゝた	どもゝゝくゝた
ち	ち	ち
どもゝゝくゝた	どもゝゝくゝた	どもゝゝくゝた

變格の活

下二段活

○此行りゝそ一段の活中二段の活ふし但し古事記上巻り

根許士尓許士而まゝ方葉八り伊許。自而うゝしなどあ

はたらきて第二の声よりてと受る八図のごとく四段の活中二
段の活なるを四段の活あるぞ　ざらば　ざらん　ざぜなどいふ
例あるは活きにもれたるものを　ざらば　ざらん　ざされ
なかくそいはるべくんばなきをまさしく中二段の活詞とおもはん
るれどかくにうけるこまされあれど活きかかるをうべくはぞかくさ
此行に外に中二段の活詞ごまなくんばぞをべしくのぞきおくべし
○変格此活詞を下に出せり活ぎまに受るてにをはなど図の
如し但し志志るすぶのてふあしは之受るを志よりも受る格
なるをはそいはぞせし。せものなどせよりのみ受るの外
はへ八異なりちを述て図に出せるてふをは八上にもいはるるごとく

又は見られて猶ましきことをはたらくになりきたるあるごとく
志志られてにをはのに他よりあらはる加行の変格のもとの
てにをはをそへて此如く用ひかるなどすべて加行の変格と
この変格とよく似かよりて見ゆるは第四の声に活きかかる
を加行なる八第五の声に活きてあるのと異にて其外八全く
おなじければ下知る八せよ。上は之とそへてせよといふ例あり

四段の活詞

○はのれ　○はこがれ　はそぞれ　○はそるれ
○はふれ　○はすれ　○はむれ　○はやれ

○きくし　○きぶし　○きやし　○きくし
くしぶし　くぶし　くぐし　くぶし
くしやし　くやし　くらし　くし
○くしやし　○くやし　○くらし　○くし
くしぶし　くぶし　くぐし　くぶし
くしめし　くめし　くやし　くし
くし　くし　くらし　くし
くしがし　くがし　くぐし　くがし
くらし　くし　くらし　くし
くしぶし　くぶし　くぐし　くぶし
くしまし　くまし　くやし　くし
くしぶし　くぶし　くぐし　くぶし
くしまし　くまし　くやし　くし
くしぶし　くぶし　くぐし　くぶし

○いそぶし　○いそぶし　○うらぶし　○いぶし
いぶし　いぶし　うぶし　いぶし
○うらぶし　○うらがし　○うらぶし　○いぶし
うぶし　うがし　うぶし　うぶし
○おくぶし　○おくぶし　○おくぶし　○おくぶし
おくぶし　おくぶし　おくぶし　おくぶし
○おぶし　○おぶし　○おぶし　○おぶし
おぶし　おぶし　おぶし　おぶし
○おもかし　○おもかし　○おもかし　○おもかしめし
おもかし　おもかし　おもかし　おもかし
○かぶし　○かぶし　○かぶし　○かぶし
かぶし　かぶし　かぶし　かぶし
○かぶし　○かぶし　○かぶし　○かぶし
かぶし　かぶし　かぶし　かぶし

○そん　そのん　たぐん　○たぐん
たてこぐん　たかん　たえん　○たくさん
ちらん　ちらん　ちくん　ちくひゃん
○ちぶん　てらん　○てらん　○てらえん
ぬきあん　ぬきばん　ぬきろん　ぬきれん
ぬきえん　ぬきふん　なん　なん
○なん　なぐん　なぐん　なぐひん
なぬん　○なぬん　なくん　なくん
○なくさん　ふぐん　○ふほん　ぬくん
ねぎん　ねやん　のくん　はきこん

○はん　はぬん　○はぬん　○はぬくん
はやん　○はやん　はくん　○はくん
○はくん　○はくん　ねくん　○ねくん
ねぐん　○ねぐくん　○ねぐやん　ふん
ふくん　○ふくん　ほん　○ほくん
ほぐくん　ほの名くん　○ほくん　ほくぐん
まん　まぎくん　まくん　まこん
まくん　まぐん　○まぐん　まくん
○まくん　まぐん　みくん　みぐん
まぬん　○まぬん　みぬくん　みてくん
ぬん　ぬん　ぬぐくん　ぬてくん

もゞん　もゝかん　○ゆどろん　○ゆやん

もよかん　ゆらん　やかん　やどん

○やたん　ゆらうん　ゆるん　○ゆるゞん

○よろん　よるん　○わうん　わるん

ゆるうん　ゆん　○ゆやん

○あくゞうん　蜻蛉日記よりかくのごとあるがつしたこうん源氏

若菜ゝゝを作りしゝ玉ゝきはまうにあるゞうしかゝと

散木寄歌集ゝ心をそゝにあくがらし物る千載集春ゝ

ゆくゝうしかれなどあり

○あハうん　鎮火祭祝詞ゝゆたもしかうつと申ゝよりをのゝし

○あかん　源氏玉蔓ゝおきし　ゆふさゞん云ゝとあり又万葉ゝ

よるものくもあゝまもとうえるもあゝまうの近八め

ゆふ切なゝめ

○あまん　古事記下巻哥ゝ於ゝやたまかさ物きゝ阿麻斯云ゝ

○あむん　万葉十六ゝきつに安年佐武と訓ゝ

○あやん　う紀か物語後藤巻ゝ血ゝ作しあやしてゝ

梅花笠巻ゝ清ゝもゝ血をさしあやしてなどしくう

○あゆゞん　拾遺集物名ゝおしゆゆがゝゝ鼠とるゞくゝ

赤染衛門集ゝ女房の如　文ときゝ忘ゝしゝろいし

なやゝめのいしゝえ

[illegible]のいしぞこ[illegible]ふこゝ法あり[illegible]

○いそぐ　源氏桐壺よいそぐ　[illegible]

よいそぐし　いづれぞなどあり　[illegible]

考よわ　[illegible]

いふ　初下二段の活　[illegible]

[illegible]

なれ[illegible]

しき[illegible]

○うながす　[illegible]

[illegible]

○うらうがす　出雲風土記より乗船而率巡八十嶋宇良加志給鞆云

○おこす　古今集別より人を心よおこすなんやとあり此活し

○おどす　梳草紙[illegible]

とのてにとは八切る　初よう受る例とれば下二段の活初とし

いふ[illegible]四段の活の子三の考八切ると続くとをうかゝる

を上[illegible]図[illegible]

下二段の活　初[illegible]

[illegible]

四段の活[illegible]

はかる[illegible]

○おびやし 字鏡に憎又御於比也須とあるこれらによりて
外にもおしなべて加の字の脱たるにはあらざるべし
○おびやかし 源氏東屋におびやかしたまふ姿とあり
○おほし 万葉十八にまきて於保之同二十になでて於保佐年
あきまたが於保世流六帖二に六になぞへておもしろくおもほ
語らひの村雨ものおぼしおほしたる松のちやしに云くながめぬ
多くしはてかくおもせるなど凡て第四の音よりある足さきめて
にまはうつらはハ四段の活用にかよはれり餘の三種のたゞち
き詞のみ此例なし
○おどろかし うつほ物語俊蔭巻におどろかさんとあり

○かまへし 日本紀神代巻に鍛作新鋳云々三代実録十八に
改鋳益神宝為負観永宝常乃鋳銭司路遠妨多依天
加太之於山城国葛野郡天令鋳作云々とみえたり
○かくそへし 後撰集にそゝきかよはし待るに云く
又あふさかにもかのそへにありくまさしくふちなる人
かよそはじ云く金葉集別にふるかくそへさん俊吉物語に
かよそへまへにさと聞かいとおもしかくうなはれかなまく
うるはそれらにちどり第三の音よりて下へはつきいする八四段の
活用の係て又じんのてにをは文字第一の音よりうつる八四段
の活用なるをも図をもんてもまゝ活べきなかけてたのごとく

しぼりしをきさてといへるは此詞此行の下二段の活にかよはせて
かよはせる　かよはされ　かよはせなどもいふ清く思ひたれど
志かいふべきを今の人かならずしも濁りて語ることゝ
なりれ出てぞつらしれて此行にかくまぎらはしき詞これかれ
外に多しよくわきまへおく清き濁りなりかし
○かよふは　蜻蛉日記にわが袖は乾くときなくしいあやめ草
人の袂にかよはせてかよはせとよみたり此詞も下二段の活の例
なれども凡て第四の音をそのまゝにて下知の詞とも用ひたる
四段の活詞の例あり下二段の活ならばかよはせよとあるべし
さるへていふ格なることより上にいへるが如し

○きこすは　古事記下巻歌に大君しよしやく伎許佐婆曰
本紀にもおほろかに枳許瑳怒　万葉十一にいさゝめとす許勢十二
にそらごとはかれぬと令聞（キコサ）せにかくし伎許散婆などもあり
○きぎすは　好忠集に雪まにきぎすの若菜のとあり
○きやすは　枕草紙にちらう山のこそおそきさかせた
まふ所とあり語の活ざまなれ
○きらすは　源氏行幸巻になかでみかどに目をきさつし
あまきとあり
○こがらすは　源氏初音にちかうもちからしてといへり
○くるべかすは　から紙物語後蘇生にすぐれたる車のみの

ゆくえしらずなりしてゆくとなり

○こはやは 古事紀中巻雄略の本岐玖流本斯とあるハ代活なり

○こころまは 神賀詞にいづゝ黒益之云く 栄花物語ゆのかき見たこなこゝはまし たかとあり

○こなは こはや物語後撰巻末をきてゆこなるまそとい

○こほる此はゝくき所

○こほれは 枕草紙にあれこそ所のしてとゝいへ

○こやは 日本紀に許夜勢屢 万葉集五りこやなるこ許夜斯なるゆ多ゆるゆはて井四のるようるの

てゝはまとゝはまと受ゝる人四段の活の格なり

○こゝは 出雲国造神賀詞に下記石根にふこ凝しとゝはう

○さゝは こはや物語あゝこそのまりにぬまそ人云くはかし

やかてきく又まつめの使の巻にいとさけはかしは手源氏

やとうお毫ふはかし 栄花こゝくの別にはかさ也

たまふ枕草紙にさゝかしおこる 紫式部日記にふるきこゝ

ゆきはかし きくなこゝ

○さはこは 狭衣四にはまこはしねこゝまとゝくあ

○さこゝは 源氏若紫にさこゝかしとあり

上ハ志ハ伝行変格ノ条ナリ しらかしこゝかゝ ナトニ同ジク病ナトヲ童ラスル語ナリ

○さこは 冊後守為忠家百首仲正記こゝのこゝ

かなのかくれなく我をたのしてあるこころぬしそとよみてうなゐ
源氏第十五たまつはきに
○まちかねたる源氏蓬生より部きぐしうはなひまちべしてといくう
○そもそも源氏明石巻より海ちかくもしらぬ物あり
○たゞに源氏若菜より光きこのぐひあぐしして
○たゞに大被初より置足波志万葉集十三より河を部あり
おもひ足椅なゞ
○部ぶに竹取物語より
赤染衛門歌集より

はらしれあきらるは此行の下二段より活きてはぐらしくき
故なり於きて下二段のとら詞よくさらしくいふ詞し
○はふらす　万葉一に仁寶播散麻思手なども多し
これもはふらすに同じ下にいふべし
○はふらかす　古今集に君がさる心をもはふらかはふじ云ゝ
○はふらくる　源氏若菜にはふらかし物するとあり
○はやす　催馬楽に藤生野かはちがえをはやしと
あれ林をはやのことなり
○はららかす　古事記上巻に蹶散かしある詞れありき
○はるかす　出雲国造神賀詞に意志波留志　天云ゝ

○はるかす　祈年祭祝詞に見霽志坐　いせ物語によもちひ
はるかされてまつらし　はるかのさんと万葉集哀傷のむ予
かきつ思ひはるかすにもあるらさで　なげきあり
○ひらく　古事記上巻に治養をひらしまつるとあり
○ひらく　紫式部日記におもひがちたらちひらつし
かく又源氏物語よひらきなも活らしいへり
○ひやす　宇津保物語の俊の巻に法馬どもいまだにひき
ひえてひやしらく　蜻蛉日記に馬ども浦にひきおろして
ひやし朗ぐらく　夫木集安法ちらしの寄ずるひやかして
ひやしきるなどあり

○ふるゝ　金葉恋より　ちはやぶるかみのみてぐらもたのみなしとはいはじ
まさきのかつらはたれかくるとか
○かくこころざし　源氏若菜ふ　かくこころざしこそ
○かくかな　おもふこゝろ物語より　かくしなふ
○まどかな　うつゝ　ものかたり　藤原忠巻ふ　みさしごろ
ゆびをかしたるもかく
○まろもち　狭衣二より　まろがしたるとあめ
○まぶろう　拾遺抵より　ふるさとはきぬをめぐるまろうし
ゆるるかくとうんむまろう
○まやか　後撰集より　いとゞたのみをまやかるらん　解心

集より　吹はらふまやかぜ　万葉集
○やそしま　万葉集二より　ちはやぶる人を和（ヤハ）跡（ト）もとこ二十より
夜波之（ヤハシ）などより　ちはやぶる
○ゆるぐ　情蛇日記より　ゆるがそめまさきのかく　拾遺抵
にゆるぐせざるこゝろ　ゆるがしたるこゝ又かぜのふき
ゆるがしたもなどいとめ　拾遺こゝろ
○よさ　古事記下巻より　誘（ヨコシラヒケラク）大日下王白さゝ　字鏡ふ　誘（ヨコス）与已須
万葉集十二巻より　人言之誘（ヨコス）手きゝて　催馬樂葦垣ふやんもく
うよさしまくしまくし　ふるぐ　ふのり
○ひろ　万葉集十六より　ひさかたのあめより　湯和可世子ぐこもこく

蜻蛉日記にゆゝしなどはべるに丹後守為忠家百首に盛忠
おもふことありの里にあるゆの湯ぞなるさへぞきこゆらん
弥か肌なども見えける
〇さて又 日本紀欽明巻に毒害(コロシソコナヒ)又仁徳巻に被蛇毒而(ヲロチニアザナハレ)とよめり
〇なくきくをきゝまぞ なびきをなげかし ものうを
まつらまぞ あちをたらし あひをみちし かへを
かとのまぞ 流むを 起くりまぞ ふむを ふまうれ くらうを
さらへうりし のまを のかせなど此四段の活に延べていく
る詞いとおほかれど今ハあらむ其の詞のむね別にかくはし
くハのぶし 活て此四段のかくもきにのぞくめるのみ

きらふ方にいはまる気し 他(ホカ)の行に延いかくるみをかくはみと
むかうれいへる例なし右の如くなくハ四段の活にかぎれわた
るを 万葉二の御言不御向をみこむかはせしハ文あやしく巻
に立為者をたゝめせれぞなどせよりあとうらうるもあさ
ちれぞといふも下二段の活にて例のたぐひのみとぞいへぞ
ふらせぞ又ふうせれぞなどよむべきにやあらむ後世の人ハ
読書などにかくきこみていはまるハ此行の下二段の活にもう
起しておくめるそのまゝにいる詞にいふ法し
〇他行(ホカノクダリ)のハまぎるゝてあなきもを此行にて其四段の活詞ども
下二段の活詞と混ひてあたらハまされなることかまへるなか

万葉集十一よりこひぞ晩師之雨のゆる日を拾遺集よりいそ
もぐもし むりなるらん 六帖二まて六りよりのぐ おもし
頌集より雨よりもまこと之やか かくもし 兼盛集よりとろぢよ
れしよりの はぐもし はぐえよりめ 重之集にくれ方のゆふはれそ
みくもし 清正集よりいそのかくもしのし かぐもし 仲文集に
今のそとてかすもしよりもまふぐこ後九 竹取のかるかふ
ぬのそもし人そもこ又かこ又ぬのそもし人ぞ人 かくうそ こ彩平物語はぐのん
又ぬのそもし人ぞ人 おくもしうぞ因ぬげ乃
のもになやをこ三ふもと行こ
むりこの巻より はこく あこぐもし に因喜かてあはこのに

かよなくもし もこ 秋の夕を心にわかもし
情野日記よりたそれるもあのにも ほのえのもし にこく
源氏物語須磨巻かき宮のはこをゆもし おかこし
にこく因藤東巻老よいかぐ ちもし 三の行くがき因ま
平物語しのもに小こまかくはに見ひ えぐもし にこく
因若菜巻よこ小こそぐ彩ここ まぐくもし うこ、
因玉蔓巻にこ彩ぬこもこ むで こぐもし ちぐんこく
因椎姫巻ふかのあるんの ちのえこもし こぐなぐこ
因椎平巻よはこのもし 枕草紙よ まぐくもこし
うぞ 栄花物語衣の陳の巻よ ちもし ちぐんこく

狩衣一の巻ノ二のまきの下ノ巻ノ三の巻ノ四の巻ノ五
に引き続きて書きつぎたるかぎりしあめひきくなどがいと
多しこれらの志しを今きせしともいふ法く思うるれ
ぞ志ろしべき方八きべて図又志るせ法ごとくいづまの行ノ
てこも四段の活用をオ二のまるきさちひみりよゐを去
のまきとうくるこまうもはまざくに引くる初ゑなる此
行の四段の活用をれぞオ二の者志ようけて志しといふ
法ノ例別めノ分四の者えげせてねへめえれ志よゆ
うゑ法ハ下二段の法用の俗なるまぞせしといひて、代行
の下二段のはくまぞにあるも四段の活用の例ノ変

すべはてかく此格ノはづれて用ひ得るを志べきなるにあ
これ志なし志ろるを 千載集の寿れ志し書(カキ)にかせしと
法ろこれも写し誤りたるもれとるえくるあ凡てまを志ろし八
中しとれを年くく書てゆ志くとハかくざれバ志ゆしとあ
且しをふと書誤まるるなる法し又竹取物語ノ且び奇
別がかをて法ろ八れど八代くと法ゆ法ろ八代四段乃
活用ゆれぞ新ろ志ゆ法ろ法ゆ(ま)ど凡
ゆいをて八下二段の法ゆ新ろ図をるえてゆ志ろるべしかく下
二段ノ活ゆしたるを新古今の代まで例ゆ志れぞこれも
ゆ新し誤りれどなる法し法ゆを今、世の人代差別(ケヂメ)を無

へちゝぎれど長なあやそすれうけまるべんての例因のさ法お
どよくえて心はおく言ままとなるり

變格の活詞

えんぎする　○おハまする　○かれまする　ぐまする
けいまする　ごうんぎする　さびまする　○さるまする
まする　せハまする　そうまする　○たえまする
○ぶきまする　祈んぎする　○ちえまする　ぢまする
○ふめまする　ちめまする　まひまする　矢いぎする
ものまする　うんぎする

○ちるあぎする外ぶ多かるなしはて此例のさゑ一ちゝ
なゝぐさまぐなる中に　　にまする　おハぶるは二ツのみ正しくこ
この活詞りそそ外ハ爲といよ詞をそくしいまするぐやぐそ二ツ
の詞のかゝになまぶまるめ
○おハぶる竹取物語より竹の中におハぶるうそをく又おハしけ
ば落窪ものがたりにおもせましうぞ又おそせで　住吉物語
いつまくやハおそぶる又祭おそせじ　源氏浮舟をりかしこ
にハおハせんとあめぶれば　東花物語月宴りおそそれど
又おそをじなど狂言　又源氏乙女巻潮月抄り大文の法
の法おそくなるまるとおそるぞなめ風人後も言くとあこ

ハ混て一本にはおいせばとあるぞ凡ての俗かもかよひてよろき

○かれする　万葉集十六に枯為禮とあり

○志ゐする　後撰集物名に志ゐせぬ　拾遺集恋四にあらぬ志ゐせん又志ゐせぬ　落窪に志ゐせぬなど見えたり

○こえする　万葉十四にたゆともこそのけぞ多延須禮とあり　又清正集にねやにこえするかなしきものなどよみたり

○おきする　源氏須磨巻におきすべくも同橋姫におきすまそおじく　栄花物語鳥辺野巻にほきすますじう　浜松中納言物語におきすなるくもゆくへなどゝいへるまでまじしい

小辞(テニヲハ)ハ切るゝ詞よりかゝれる例なり

○もえする　萬葉十四に柳こそきれはえ伴要須禮とあり

○ふりする　拾遺集恋五にしもふりすとものふりせぬなるらん

下二段の活詞

此さまも俗にいへるといふ例也　但しこれ例にはたがひたるもまじれり

あけする　○あたへする　○いれする　うけする

○おこたする　おさへする　○きこえする　きつけする

きこえさする　こたへする　寒ぜさする　ごらんぜさする

○志らへする　まけする　○せさする　○ゆへする

○ながらへする　ながれする　○ながハする　のけする

のこりのけする　そまする　○ちぢらする　ふけする

○まゐぞろる　○まかりそろる　○まかりまゐそろる　○まゐりそろる

○もりそろる　やそろる　よのまそろる

○右の挙くる外いそがるる　おもはるる　ゆくるる　まるる

もるる　よるる　もるる　など他の然さるる詞数いと多

し活とぐくそもさびさてこれを今俗の八此行の四段の活ふ

いまゆくるる　の活なるべき思ひまぎふ活かくそなもの他の然さ

いまる活をてふもむかしはいくそ八きべて貴人を何事も

人をおわせてものしたまふなれどおのれらもふもむかう

ばかるるなる活しはてそまをもやたにてみるものし

いまのふもやがそかくいくるるはかし又のことふ　まゐるる

を今一きハいくるみそのこまそるるきてゐさるるとりひふこと

奥じたりあをと　奥ぜさせるふといひ又活ゑ入なるるを九

活ゑまそるるをもゆくまに活ゑぜまそるるといふこびえし

皆これ活りそるみていくる詞古こ八此行四段の活ゑ延めこと

活詞ゑそこそいくるまめまそのしハそのゑにいまめ

○凡て他の然さるるそこれ活き物を然まそる八此行の四段

の活まめ後拾遺寿ゑ抜う書を採の花にみちハせて静穀

おほのせてしかな源氏紅葉賀ゑ多かまめてなるこせな

ぶし紀こ言あるいくる後拾遺なる八採の花ふ抜あのうちハ

まそるるしもるるといひ源氏なるを源氏の名れ柴上ゑ手法を

なゝはし　えなのみまいまるるうめて苦りの他りの然さうるる方なれども
活用活の詞を用ひて　古今　秋よふちもかもよりる秋
ごとに　源氏紅葉賀ふもかりて　源氏夕顔ふもかりて　などの活
しもとなりそのぬふ心のくるてども　なるる活しなどある八
藤ちの月の野を分ふ八ふ　源氏君の墓上を　然なゝ八し
たりふもいまるうて　物を　然まるるものれども四段の活の方を用ひ
ふるものりの差別（ケヂメ）いとまぎはしよくせぬ八ぬ活し
かゝこがるに活きてまるだゝもし　まるる　たり　挙りる　二の外なか
ゝぐしその外にふるとふるとあるるゝ八自他をわかち
て活きゝはしまるるもの別に自他の詞のゝ活きて別に

ゝそゝゝくいふ活しし
○上りるあまるる詞の中に此行の四段より活くかくりそ
まるゝはし　形る八ま　澄を　次くふ出せの此けば　先古へ
ゝ活　歩のなめしりやづもながくるるるるを今八まる記
らそゝて此ゝもそれば　強るる　多しそ八ゝるるれば
此下二段の活詞を今俗言ふ　古行の四段の活ふいふよう
て活まるるものしようくわまりくおくゝ活し
○詞八る　万葉集十九　安波勢やめまゝあゝき　活
　安波世受　於遣来ふ歌　合の詞八せそなりに八るる　伊勢物
　絶ふおやのあそ八れども　竹取物語　ゝ八せま

えんやハとらく落窪ノ男ハそせしらぬ 源氏箒木ふはすゝ
ゑあきらせんの心なくねど又夕良意ノわきまへのかんかと思ひ
ありせぬでらさ 順集ノ風さむらかつくかりうちノはらすまされバ
言明集ノ美なくさはりくる人もさきもちさおもしなかど抄く
いかにおかし此詞あそらさん あそらさんバ あそらしなど四段ノ九
活く也く思へる也ど然そくきあくるとハ一ツもなく皆うの
ことくいまめ式源氏のあそらせぞもゆくはまのさきをいふ
明まうで四段の活詞のかきなつバハなどといふ俗し
○いまのはる ハせ物語ノかゝるそ六いふたいはるとふを
う部ほ物語 後落窪にわか子のいまのせんかとふハさら 源氏
浮舟ノ右大将の宇治へいはるゝを抄くこそきこそやまや 枕冊子紙ふ
まさらぬでなくなうとてかくわくひいまのはるちとぞうしなかど
のこりへそるなれバに 安法法師集ノかんの光さうのかなくらの
説ノこきをとちぎりていはせ給めけるにいひやらふなれるあり
此て此詞この行の四段ノ上さ活く詞とおもハれしに右の如く
あきらさで絶え此活ノ九用ある詞とえんくあされどまれなりので
これらの外ハあらゝ通りで同じとくきへいふもかく二
かつに活きて同じきあるる詞抄されたる通例あり
○おくはる 万葉十八ノ於許世牟あり又十九ノ於已勢多流
古今集ノおくらせてうはるまみともとそそ 後撰集ノ子さらおなど

おくそくをもとこそ　伊勢物語ようかきおよびてかしこうん
おくせがこれをもとめていぬ　蜻蛉日記ようれをそうどえん
こうみくもおくそれども　源氏榊よういせまでこれをおもひおくせん
馬内侍集ようのぶ文おくそれをこそなどおいおくおし
これくも四段ようはそかしうるへ　ものしけんおくせばみこん
おくそれども　みおくそれバなくも四段の活用ようバんおくさべ
みくもおくせども　みおくせばいかがこまめこんこめしうる
などのこをもをもを　四の言よりも受るも下二段の活用の例し
○きそのぶる　万葉十八ようきにきう勢年　後撰集ようより
なまいでくまよりたうせん　又けうかよ　をもわれのきうせよ

大和物語ふをきうせん　源氏箒木ようきそのうせんなど
これも　　きうしなどそのそこ
きうしなどそのそこ
○くぶる　拾遺集ようたるにくそせてすいたそうとあく
これも　　の活用なくそはしてとしのふ保ようはそかく他
に　　ようきぶるハ上りもいくるめくれて皆こそ活用し
○志くぶる　万葉二十小志良世年　古今集恋ようくるしき
このと人ようきらせも　於逢集ようそうせも　後拾遺集
秋ようきくぶるものハ　蜻蛉日記ようたくそめともえくそきくせね
源氏物語総角に揺くそ思ひきくまそれ　拾草紙ようたき

○やちまくと上

○四十九

さゝする船うんとなどゝ狂いかゝしこれも四殿の活ようこと
いかゝ　たもるれどさらいする例なし
○四ハ上行変格ノ活用詞ナリ　本　貴人ヲタフトミテ　せさする　云フ　貴人ハ自ラ事ヲ行ハスモノニテ　オモト人何事ヲモレテ　クルモノ　其オモト人ニ分セレメテルハト云フヨリ出タル詞ナリ
○せさする　物語書にその人をとゝのふとみてせさするとい
歴ニ御覧ぜさすると云ハオモト人其物ヲトリテ貴人ヲレテ見セレルヨリ片云フナリコレモ立ツテ貴人ノ自ラ為ル事ヲモレカ云フトナリ
まもるいかゝしこれも　活用　物語ノ
○みゝ　○ノ言ハ四段ノ　ヒトト云フ　本ナルコトノ活ハ人ヲ　レテノ　レセレムルニテ　所謂他動也
○大和ものがたりにとらせぎゝんものを　源氏夕
顔ヨリ　ゝせられぎゝあり
○なゝ　○コノ言ハ四段ノ　ヒトト云フ　本ナルコトノ活ハ人ヲ　レテノ　レセレムルニテ　所謂他動也
○なゝ　○コノ言ハ四段ノ　ヒトト云フ　本ナルコトノ活ハ人ヲ　レテノ　レセレムルニテ　所謂他動也
○源氏紅葉賀　なんかゝてなゝせなどゝ云
○ヨ本ハ　後拾遺集春ヨ　梅ノ香を　梅の花ヨ　ホ本ハ　せて
梅ノ枝ヨ　ばかせてしぶ　源氏若菜ヨ　やく　梅　をそゝもい
ちぶるゝ　ものあり

○もしらる　竹取物語ヨ　あゆこそくる馬をはしらせん
伊勢物語ヨ　しらせなどゝ云　あどいくう
○まもる　源氏宿木ヨ　まもるよぶまじくとなめまぜとハ
○まもる　ヒトト　ラ　ル　ル　ル

もゝ[illegible]ふるれどもゝの四段よ活きたるもゝ[illegible]なし

○まろ〳〵ふる源氏物語かいそきやまろ〳〵せてなど物多し

自 むすぼゝる 和名鈔ニ哽咽無須 源氏あのしの君ニ物もゝ

○コノ言ノ物ニ唇音ニテ物ノ形ヲ表ルモノ多シ

むせぶ[illegible]はもなのもゝ[illegible]

○ちく〳〵まぜもゝる[illegible]どあるハまろ〳〵せの約まりしるにてこゝ

○コノ活用ハ[illegible]ノ約リタルニテコノ活用ノコノ五ヤウアカズ負上

の活用ハ[illegible]行の下二段の未かい[illegible]なり又

萬葉十五ニもゝ[illegible]ふ〳〵[illegible]を伊麻勢与とあるも同じ